

MRJの部品作る中津川・加藤製作所

国産で初めて成功したジェット旅客機MRJ(ミツビシ・リージョナル・ジェット)の飛行の舞台裏には、県内メーカーの技術力もあった。その一つが中津川市駒場の金属部品加工メーカー「加藤製作所」。一昔前なら年金暮らしだった60歳以上の「シルバー社員」がまだまだ現役で活躍している。

はばたけ シルバー社員



MRJの主翼部品をつかった「航空機チーム」の職人たち。60歳以上が過半数を占める＝中津川市駒場の加藤製作所

職人たちは11月11日、名古屋空港でのMRJ初飛行の瞬間を職場のテレビで見守った。仕事中の遠藤久さん(65)は見られなかったが、自分のつくった部品が使われた国産旅客機が飛んだことに、感動を覚えた。「いつかMRJに乗ってみたいですね」

もとは栗きんとんなどをつくる和菓子職人だった遠藤さん。約2年前、この会社に入社した。菓子づくりで磨いた手先の器用さを、今では航空機の部品づくりに生かしている。「きっちり

と、絶対に間違えてはいけない仕事。非常に緊張してやっている」

従業員約1000人のうち、半数ほどを60歳以上の「シルバー社員」が占める。約6年前に発足し、MRJの部品も手がける「航空機チーム」7人のうち、5人が60歳を超えている。

自動車を設計していた長瀬修次さん(64)は、今年9月に入社したばかり。「MRJをきっかけに、新しい仕事がもらえたら、そのためにしっかりとしたもの納めて、信頼関係をつくっ

航空機、6年前に参入 ■ 従業員半数が60歳以上

ていきたい」

加藤製作所は1888年の創業。主に家電や自動車向けの部品を手がけてきた。得意とするのは、一枚の金属板を溶接したり切ったりせず、力を加えて箱形や筒形といった形状に変える「絞り加工」。高度な職人技を要するため、海外生産が難しい。

航空機製造の分野に参入したのは約6年前。米ボーイング「787」の主翼部品を受注した。3年ほど前には、MRJの主翼部品の受注に成功した。加藤景司社長(54)は「MRJに携わられて、ありがたいと感じた」と振り返る。

航空機部品の売上高は全体の5〜10%程度。家電や自動車向けの部品には及ばないが、今後、MRJの受注が増えれば、おのずと航空機部品の売り上げも増えていくとみられる。それを見越して、昨年春には2階建ての専用建屋も新設した。

加藤社長は「MRJが世界の空を飛ぶのは、日本人にとって誇りや励みになる。中小企業は見えないところで活躍しており、ものづくりをしている人たちのやりがいにもつながる。これから計画通りに進んでいくことを祈っています」と話した。

(森直由)